



赤ちゃんの泣き声

横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校 2年 吉越 千織

土曜日の早朝、耳鼻科医院の前には、すでに五、六人が並んでいた。私もその列に加わると、後から赤ちゃんを抱いている女の人が来た。赤ちゃんは泣き声をあげている。そのまま数分経った頃だろうか、私の後ろに並んでいたおじいさんが、その親子に順番を譲って笑顔でこう言った。

「いいぞ、いいぞ、もつと泣け。」

「泣き声が小つさいぞ。」

その場にいた全員が、驚いた様な顔をした。私は、赤ちゃんが泣くのは「しょうがない」と思っていた。うるさいと感じていた人も、もしかするといたのかもしれない。けれど、もつと大きな声で泣いていいよ、という思いが言葉になったことで、みんなで助け合おうとする雰囲気になったのだ。私も順番を譲り、一人、また一人と順番を譲っていき、最終的に赤ちゃんが一番目になった。その子の母親の目元が、赤くなっていることに気づく。私は晴れやかな気持ちになった。

赤ちゃんが泣くことは、生きている証だ。

「あなたはね、生まれてきた時、本当に泣き声が大きかったのよ。」と母に言われた。両親も、親戚も、助産師さんも、立派な産声

をあげてくれることを願っている。私達は、誕生するその瞬間から、誰かの願いを叶えているということだ。そして、成長する中で関わる色々な人の願いを受け止め、今度は願う番になってゆくのだろう。

あの親子が、受付を済ませて帰る時、赤ちゃんは寝てしまっていた。きつと泣いたから疲れたのかな。その寝顔を見ながら、願いは思いやりに変わる時があるのだと思った。この日の様なことがまたあったら、私が最初に行動を起こそうと決意すること。診察を待つソファに座り、いつもよりゆつたりとした空間に包まれながら。

(審査評) 日常のふとした出来事。まるでその場に居るような臨場感が文面から伝わり、作者のみならず読み手側まで温かい気持ちにさせて頂きました。忙しく、余裕の無いといわれる世の中にこのような行動を起こせる事、またその行動に影響を受けて続く事、そしてその気持ちを大切にしようと思う事が「願い」と交錯した非常に素晴らしい作品だと思います。

酒井久美子